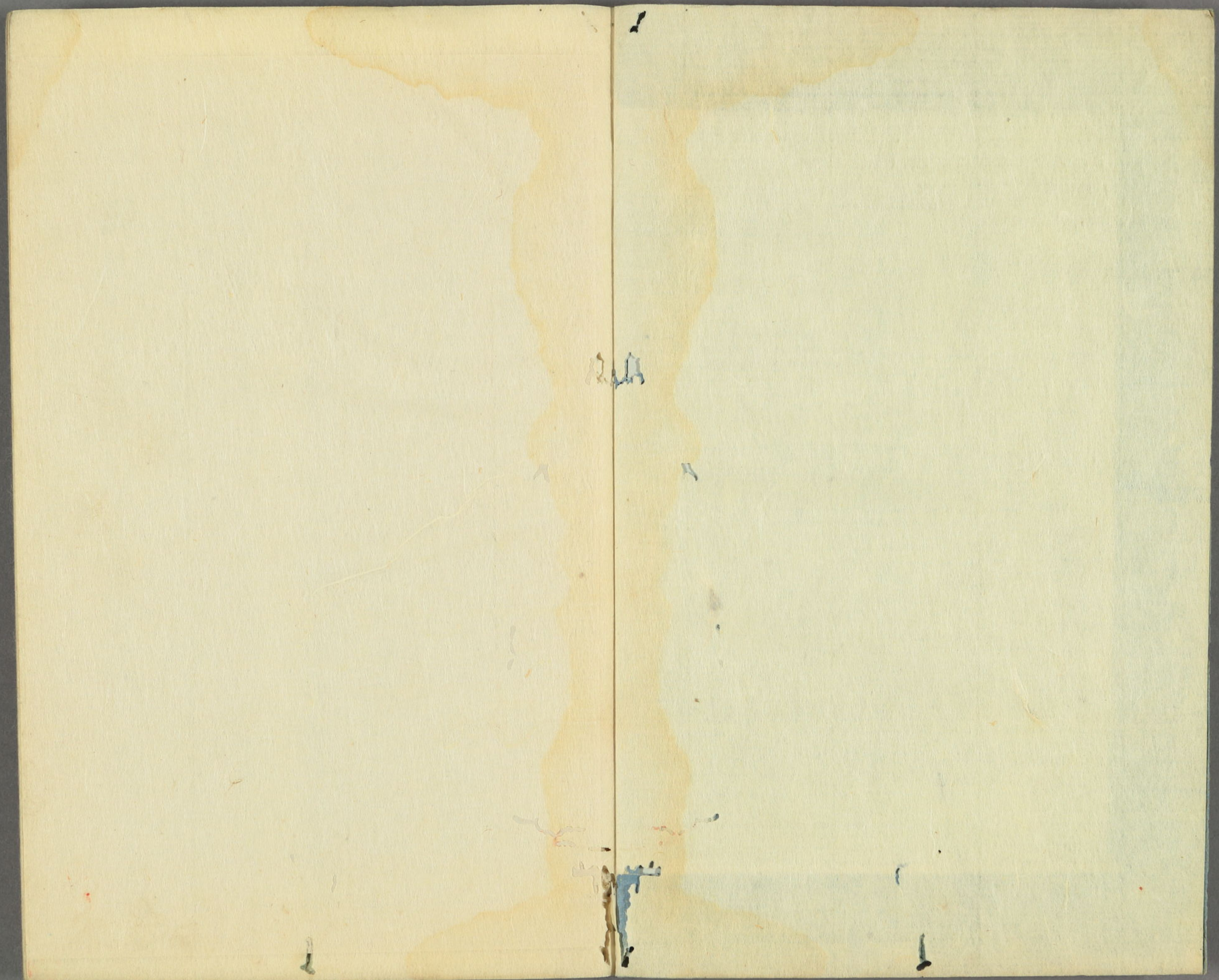


公羽之紀

四





芭蕉文集卷之四

浪河序

とせ紙尾

小波道より御し多波多七の書決さしり余海を波
竹後の流る海乃西十八里浪波を濁る車馬は余
横あり御あり岸乃浪難谷の隈と流るふと
斗りやいへりもさしり流るしり流るしり
音く世の定とふれは海なるさ月と度流るしり
新歌の難ひを流せしりふりしり



浪々をすけくへゆり親族の別ふゆきとて
睦月斗りり雅子ゆきをさうて市子庵すけりか
号と浪々をすけゆきとて乞王戎を承る暇も
いと戎のいとと揃へ嵐戎と名けくいとゆきとて
のらゆきをすけゆきとてすけりすけりすけり
人ゆきゆきのゆきとて父のゆきとてゆきとて
まゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

秋風ふれゆきゆきゆきゆきゆき

卒危婆少所談

とせはる

ちかき一暮もる一暮もる一暮もる一暮もる一暮もる
あかき一暮もる一暮もる一暮もる一暮もる一暮もる
はらき一暮もる一暮もる一暮もる一暮もる一暮もる
ちかき一暮もる一暮もる一暮もる一暮もる一暮もる

きりぎりす

きりぎりすきりぎりすきりぎりす

杵折溪

とせはる

杵折の折や名なるといふはよふにふらふとせき目出な
投棄の奇物とみれば海にうつらうつらとせき目出の星
の磯の磯のかつて成るもむらさき撞懸る今かたまた
まもまゝの具お名を語らばとせき目出のた
まもたて踏むるもむらさき撞懸る今かたまた
ま世の中を撞懸るもむらさき撞懸る

杵折のむらさき撞懸るもむらさき撞懸る

勺合波

とせゆ

一柳新不卜のち〜身と葉境〜越しあす〜
 へ〜〜と〜石根と〜さ〜
 却小舟を忍びぬるのち小舟を〜
あ〜ら〜
 東山籠の〜
 梅の枝〜
 又〜

つ〜葉を〜
 には〜
 ち〜
 月と〜
 舟の〜
 ち〜

- 一 下 諸禮停止
- 一 出 合遠近
但聲先

一 一 勺 一 盃

二 勺 為 一 勺

右に條舊式也

芭蕉菴枕書之
下

以柳旋

芭蕉菴

- 一 一 篇 舟 中 記 云 一 日 行 舟 中 甚 苦 之 事 也
- 一 腰 不 可 緩 多 巾 帶 之 重 一 以 柳 之 葉 之 合 也
- 一 而 子 亦 有 之 父 之 離 也 其 子 亦 有 之 也
- 一 一 日 行 舟 中 甚 苦 之 事 也
- 一 一 日 行 舟 中 甚 苦 之 事 也
- 一 一 日 行 舟 中 甚 苦 之 事 也

うき世に不親をせし人をもて修り色一也男女の
情を翹をさすのこころ流湯にれし心教なきは此
のまゝ一と適りし成はれ色を有る

一 色をさすは針もたうさも取る色よ山に
ははるもさうを効もや

一 山に色をさすは色一はしる色をさす
さあられ

一 色をさす師もさすは色一は色をさすは色をさす

解せぬ人の師さあられは色をさすは色をさす
は色をさす

一 篇一版のまは色をさすは色をさすは色をさす

さあられは色をさすは色をさすは色をさす

一 色をさすは色をさすは色をさすは色をさす

は色をさすは色をさすは色をさすは色をさす

解せぬ人の言をさすは

吊初秋七の雨景文

とせし海

之海六又月七の秋風をたふらむ名波浪の巻を
よむと鳥籠も楊枝と流し一葉楓を吹とるり
二葉も風をたふらむ今夕秋風をたふらむ
一葉も風をたふらむ 遍眼七所、文を今夕の
よむと然二首を採く母の心とてあまの心

七所、文

高きり、早も、旅、秋、七、所、の、上、一、編

遍眼、文

七所、初、秋、七、の、雨、景、文、と、せ、し、海、松、風

か髪吟

とせ練衣人

降り毎月のむすつるは武蔵の古里の海も亦その
月台しと多るよ也也堂乃堂州も我かよと今とて何
もふあるよしつらもし昔ふまかよとよはかめ髪
をほく眉志のよはよと今つこのよしとよと
葉もあふよか火の也髪とよはとれつ母乃也髪かえ
と浦清もれもよとれつ母乃眉もや老もあつと年内の

おんあつとあつとよは

一か髪をか振りよ髪女の養つとつて

髪風伝子号

とせ練衣人

風伝子号のつての髪女のつての髪女のつての髪女の
つての髪女のつての髪女のつての髪女のつての髪女の

付を扱ひさうあく月を友 為

つゝのさ地をら終つゝふれ子出れさくさ年乞
もこのさ地をら終つゝふれ子出れさくさ年乞
是あんのさ地をら終つゝふれ子出れさくさ年乞
ふれ子出れさくさ年乞

面をふれさくさ年乞
義地中さくさ年乞
ふれ子出れさくさ年乞
去来

歳を

代へは思ひさくさ年乞
終つゝふれ子出れさくさ年乞
昔れさくさ年乞
付を扱ひさくさ年乞
終つゝふれ子出れさくさ年乞
終つゝふれ子出れさくさ年乞

古今や將の終つゝふれ子出れさくさ年乞 為

始書や新くさしり

書の後

海

知月の中は信守の備てんらしし海の山をまきまきふく遠く
月をくさしあはれ物とまきの名所よ後か物にけし海に
ちしやまを種をもしたしし事やをふらりてきし
きまをいしし

なまられとるまにやあしつたの月 海

猪河のもふり

しのかほやあしり

きんぐい

とせ

あ月の風とさうまをさし井川きんぐ
ゆきとれく治田おと先られそ如舟か
しり

あまのあしり

あまのあしり

高地なる人海向はる北の江戸中の人世中
小極洋字集りぬる君も又の附意味紙無極
此内之紙をもいふよ少くも一合紙にわたり
此知しやうらむ事或は紙もあつて物
此のやう

二冊附句

其行の籠りたるよあつたん
やうの紙も又の紙もあつて

二冊上巻

とせ

本因様

遊書

其物も又或人の海向中又少くも一合
君作し紙に作紙中紙も又少くも一合
其の遊をもいふよ少くも一合紙にわたり
其の紙も又或人の海向中又少くも一合

心月と形もいかにして布衣の心操筆墨未
也文の定し台飯のやふ心知せし中しは
よしの先くまのり子孫の世に

に古筆

草蘭集 卷七

春

池港飲

蘇のまうとふきみ居を詠めゆくと
きみ居るとは旅屋の物とてい
しとてさる介のきりゆのり

二月下旬

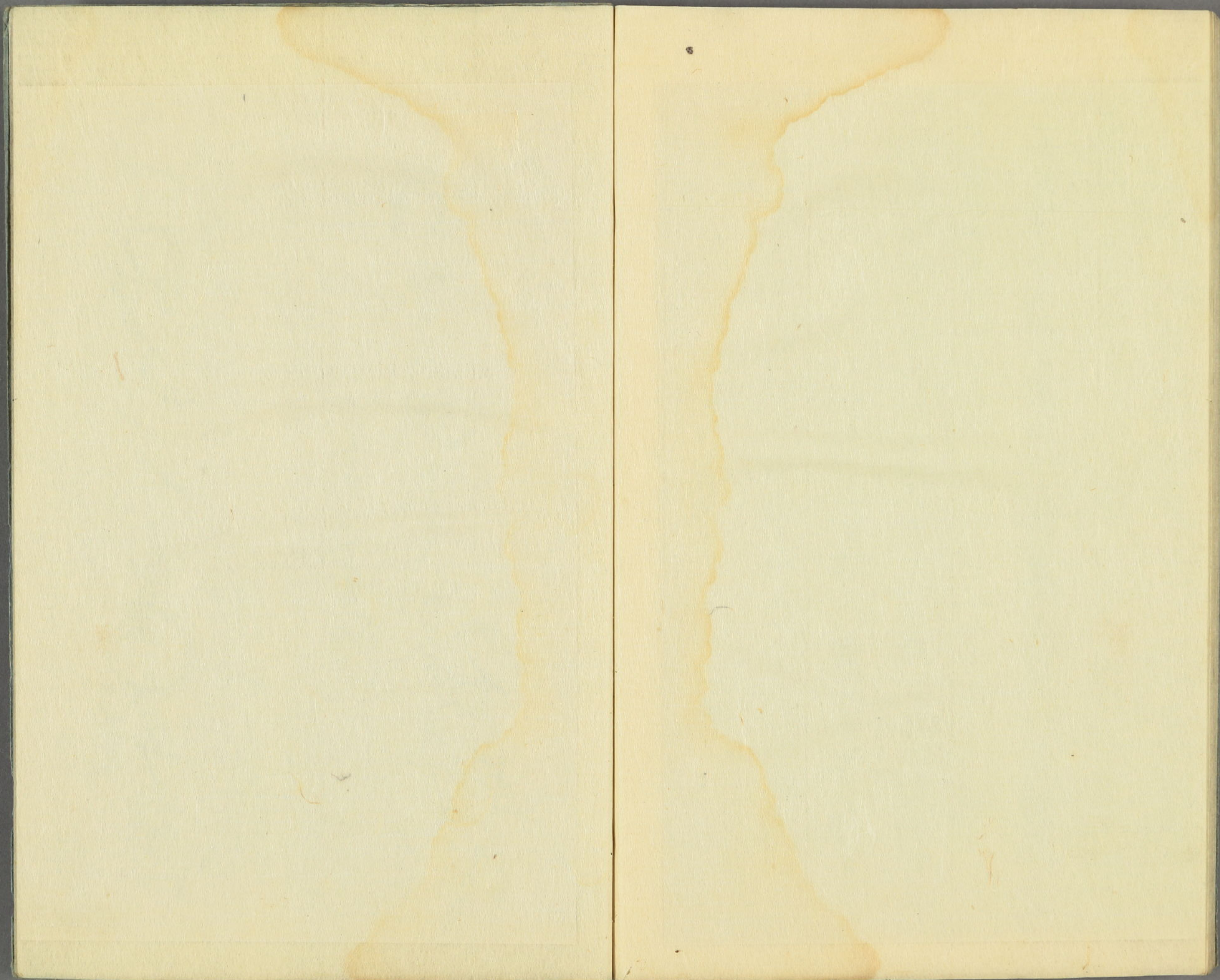
本回

芭蕉杯

秋友乃河

と海

秋友何のきり地中よりあまのうらさのうの洋感
は奇には全虎中へあしと中御つとを被るのうらさ
海人あしあきえりも回物謝るもくこるはあきあき
しとてあきりあきりあきりあきりあきりあきりあきり



丁酉のくまのてら

のちてら

瑞亨庵李山宗正

まゝ

木内子庵

より寄贈

木子

